



DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0803

三重県津市柳山津興600-5 滝澤方
600-5, Yanagiyama-tsuoki Tsu-shi

TEL 090-4867-1476

FAX 059-227-8010

N°127 juin 2023 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

2023年度 総会とパリ祭パーティーのご案内

三重日仏協会の2023年度定期総会及び「パリ祭パーティー」を下記のとおり開催いたします。

新型コロナも一段落した模様です。感染防止に努めながら久しぶりに会員の皆さんが一堂に集う総会と、10日程遅れましたが「パリ祭パーティー」を開催いたします。総会の後の記念講演では、フランスで研修員をされていた鳴海康平氏に講演をお願いしております。

昨年の9月に三重大学へ来津しているフランス人留学生もパーティーに参加されます。皆さん日本語が話せて、楽しい集いになると思います。

なお、会員各位には本紙面にて総会の案内に代えさせていただきますので、同封のハガキにて7月15日までに出席をご連絡ください。

記

日時：7月23日(日)

午後3時より 総会

記念講演 「フランスの舞台芸術の歴史と今」

講師：鳴海康平氏（第七劇場主宰・演出家）

場所：三重県総合文化センター・2階中会議室

午後5時より 「パリ祭パーティー」

場所：三重県総合文化センター・1階「リズカフェ (RIZ CAFE)」

パーティー参加費 7,000円

*「パリ祭パーティー」は会員でない方も参加できますので、
お誘い合わせのうえご参加ください。

<鳴海康平氏 略歴>

第七劇場、代表・演出家。Théâtre de Belleville、芸術監督。

名古屋芸術大学 芸術学部舞台芸術領域 准教授（2021-）

ポーラ美術振興財団在外研修員としてフランスにて1年間活動（2012年）。

演出以外にも、フェスティバルディレクターやアドバイザー、日本各地での俳優や市民、学生を対象としたワークショップを実施。教育・育成活動も行う。

goût de maman

三重大学に留学しているフランス人留学生にお袋の味をお聞きして、その料理を再現する会が、6月10日スパゲッティカフェサンマルコで開催されました。留学生4人をゲストに迎え、会員10人が、札幌市で長年レストランをされていた清水シェフの再現による4つのお袋の味とシェフオリジナル料理、サンマルコ特製のおんかけスパゲッティに舌鼓を打ちました。どの料理も素晴らしく紙面ではお伝えできないのが残念です。留学生たちは9月にも故郷へ帰り、思う存分お袋の味を楽しむことでしょう。

留学生のお袋の味



左：クロックムッシュ 右：キッシュ



タルティフレット



アーモンドとチョコレートの梨パイ



集合写真

鷗外のフランス語

矢野 隆嗣

■はじめに

森鷗外に関心を持つきっかけとなったのが、学生時代に読んだ松本清張の芥川賞受賞作『或る「小倉日記」伝』である。『小倉日記』は明治32年からおよそ3年間、鷗外が陸軍の軍医として小倉に滞在したときの日記であり、ながく所在が知れなかった。戦後、鷗外の末子・類の自宅で発見されるまでの空白期間がこの作品の背景になっている。

■退屈ヲ知ラス

鷗外は東京医学校(東大医学部)に12歳で入学し19歳で卒業した超エリートである。22歳から4年間ドイツに官費留学し、帰国後まもなくドイツ三部作(『舞姫』、『うたかたの記』、『文づかひ』)を発表。鷗外の多彩な履歴は眩しいほどである。36歳で近衛師団軍医部長兼軍医学校長に昇進するが、その翌年、小倉第十二師団軍医部長を命じられ小倉に赴任した。当時の小倉は、東京から汽車と船で3日を要する遠隔の地であった。鷗外研究家の多くは、これを左遷と評し、小倉で鬱々とした日々を過ごしたような印象を与えるが、一年後親友・賀古鶴所にあてた手紙のなかで、「少シモ退屈ト云(いう)コトヲ知ラス」と記している。

■学び続ける

鷗外がドイツ語に秀でたことはつとに有名であるが、小倉でフランス語を学び始めたことはあまり知られていない。市内のカトリック教会にフランス人神父・フランソワ・ベルトランがいた。鷗外は仕事を終えると、軍服から着物に着替え、週5回教会に通ってフランス語を学んだ。

あいた日は曹洞宗安国寺に出かけ、住職・玉水俊競から仏教哲学(唯識論)を学び、住職には原書で翻訳しながらドイツ哲学を教えている。帰宅しては、独学でサンスクリット語まで学習していた。



小倉時代の鷗外

■倦むときは

鷗外も人の子、疲れたり、勉学に飽きることもあったはずである。鷗外が訳したドイツの箴言集がある(邦題『智恵袋』)。「一人で居れば退屈する。それは自分が自分に倦(あ)きたのである」。そのときはどうすればいいか。鷗外は言う「書物からにせよ、現実の生活からにせよ」あたらしい思想を見つけ出してくるがいい。そしてそれを自分が自分自身を相手にして語ると

きの話題にせよ、と。何れにせよ、なにかの行動をおこさなければ退屈は消えないと説くのである。

■二人の回想

小堀杏奴は鷗外の次女である。幼いころ、「なんでもないことが楽しいようでなくてはいけない」と父に教えられた。杏奴は「この世の中のどんな些細な小さなこと、或いは物にも、深い意味がひそんでいると感じられる」ようになったと述べている。

永井荷風は鷗外を偲び「競争と云うような熱のある興味は、先生の味わおうとしても遂に味わえない所であろう……時代より優れ過ぎた人の淋しさという事を想像せずには居られない」と書いている。

■おわりに

鷗外の語学について述べた。〈人は倦むもの〉という前提に立ち、競争を無用のものとし、たのしむことに重きをおく。鷗外の〈まなび〉は示唆に富んでいる。

第22回文芸講演会レポート

4月9日、柏木隆雄先生をお招きして、第22回文芸講演会が開催されました。一般市民、協会のほか柏木先生の教え子4名（千葉、大阪、兵庫）も加わり約30名が聴講されました。二人の歌人、会津八一・吉野秀雄についてのお話で、奈良の古寺、古佛を詠んだ歌が味わい深く紹介されました。翌日の夕刊三重に講演内容の詳細が掲載され、三重日仏協会 HP でご覧になれます。一通の手紙から始まった師弟関係に心惹かれ、会津の養女の死、吉野は伴侶の死、哀しみが二人の歌を純化、深化させてゆくお話に胸を打たれました。コロナ禍も落ち着き、講演会のあとは恒例の懇親会が「サンマルコ」で開かれ、奈良日仏協会の三野会長も参加されておおいに盛り上がりました。

（文責 矢野）

